

## [D年] 三位一体主日(2020年6月7日)

## 【旧約聖書日課】 イザヤ書40章12～17節

- 12 手のひらにすくって海を量り  
 手の幅をもって天を測る者があるか。  
 地の塵を升で量り尽くし  
 山々を秤にかけ  
 丘を天秤にかけける者があるか。
- 13 主の霊を測りうる者があるか。  
 主の企てを知らされる者があるか。
- 14 主に助言し、理解させ、裁きの道を教え  
 知識を与え、  
 英知の道を知らせうる者があるか。
- 15 見よ、国々は革袋からこぼれる一滴のしずく  
 天秤の上の塵と見なされる。  
 島々は埃ほどの重さも持ちえない。
- 16 レバノンの森も薪に足りず  
 その獣もいけにえに値しない。
- 17 主の御前に、国々はすべて無に等しく  
 むなしくうつろなものと見なされる。

## 【使徒書日課】 テモテへの手紙一6章11～16節

11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、信心、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。12信仰の戦いを立派に戦い抜き、永遠の命を手に入れなさい。命を得るために、あなたは神から召され、多くの証人の前で立派に信仰を表明したのです。13万物に命をお与えになる神の御前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な宣言によって証しをなされたキリスト・イエスの御前で、あなたに命じます。14わたしたちの主イエス・キリストが再び来られるときまで、おちどなく、非難されないように、この掟を守りなさい。15神は、定められた時にキリストを現してください。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見るのできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## イザヤ書40章12～17節

- 12 誰が手のひらで水を量り  
 手の幅で天を測り  
 升〔直訳→三分の一尺度〕で地の塵を量り  
 天秤で山々を  
 秤で丘を量ったか。
- 13 誰が主の霊を計り  
 助言者として主に教えたのか。
- 14 主は誰と相談し、悟りを得たのか。  
 誰が主に公正の道を教え  
 知識を教え、英知の道を知らせたのか。
- 15 見よ、諸国民は手桶の滴のように  
 天秤の埃のように見なされる。  
 見よ、主は島々を  
 細かい塵のように持ち上げられる。
- 16 レバノンに燃やすには十分ではなく  
 その生き物も焼き尽くすには  
 十分ではない。
- 17 諸国民は皆、主の前では無に等しく  
 主にとってはうつろであり  
 空しいものと見なされる。

## テモテへの手紙一6章11～16節

11しかし、神の人よ、あなたはこれらのことを避けなさい。正義、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を追い求めなさい。12信仰の戦いを立派に闘い抜いて、永遠の命を獲得しなさい。あなたは、そのために召され、多くの証人の前で立派な告白をしたのです。  
 13万物を生かす神の前で、そして、ポンティオ・ピラトの面前で立派な告白をして証したキリスト・イエスの前で、あなたに命じます。  
 14私たちの主イエス・キリストが現れる時〔直訳→の顕現の時〕まで、落ち度なく、非難されないように、この戒めを守りなさい。15神は、定められた時にキリストを現してください。神は、祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、16唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、誰一人見たことがなく、見るのできない方です。この神に誉れと永遠の支配がありますように、アーメン。

## 「新共同訳」

## 【福音書日課】ヨハネによる福音書14章8～17節

8フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、9イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。なぜ、『わたしたちに御父をお示してください』と言うのか。10わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか。わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない。わたしの内におられる父が、その業を行っておられるのである。11わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。12はっきり言っておく。わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとへ行くからである。13わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。14わたしの名によって何かを願うならば、わたしがかなえてあげよう。」

15「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。16わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## ヨハネによる福音書14章8～17節

8フィリポが、「主よ、私たちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と言うと、9イエスは言われた。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、私が分かっていないのか。私を見た者は、父を見たのだ。なぜ、『私たちに御父をお示してください』と言うのか。10私が父の内におり、父が私の内におられることを、信じないのか。私があなたがたに言う言葉は、勝手に〔直訳→自分から〕話しているのではない。父が私の内におり〔直訳→とどまり〕、その業を行っておられるのである。11私が父の内におり、父が私の内におられると、私が言うのを信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。12よくよく言っておく。私を信じる者は、私が行う業を行うだろう。そればかりか、もっと大きなことを行うであろう。私が父のもとへ行くからである。13私の名によって願うことを何でもかなえてあげよう。こうして、父は子によって栄光をお受けになる。14私の名によって願うことは何事でも、私がかなえてあげよう。」

15「あなたがたが私を愛しているならば、私の戒めを守るはずである。16私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。17この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、それを受けることができない。しかし、あなたがたは、この霊を知っている。この霊があなたがたのもとにおり〔直訳→とどまり〕、これからも、あなたがたの内にいるからである。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・6月7日「三位一体主日」の日課主題は「真理の霊」。

・「三位一体主日」は、教会の伝統として定着した教会暦の中では例外的な教理的主題に基づく記念日であり、西方教会(ローマ・カトリック教会)では14世紀に正式な教会暦に採用されたが、東方教会(正教会)では採用されていない。「三位一体」の教理は、紀元325年、ローマ帝国で公認されたばかりのキリスト教会が皇帝によって招集されたニカイア公会議で議論の末に「正統」教会を規定する教理として確立したもので、その際の公式文書「ニカイア信条」は「正統教会」か「異端」かを判定するものとして位置づけられてきた。実際には、ニカイア公会議に参加しながら「ニカイア信条」に同意しなかった教会グループ、その内容に同意しながら文書としての「ニカイア信条」を受け入れなかった教会グループが存在し、現在まで少数ながら存続している。また、「ニカイア信条」を公に受け入れた多数派の諸教会であっても、その後の公会議で採択されたいわゆる「古代信条」に基づく教理を受け入れていない教会グループが一定の割合で存在する(エジプトのコプト教など)。さらに、「ニカイア信条」そのものを受け入れている多数派教会(西方教会＝カトリックおよびプロテスタント、東方教会＝ギリシア正教系)であっても、西方教会と東方教会では厳密には異なる文言の「ニカイア信条」を用いており、そこには「聖霊」の位置づけについての理解の違いがある。なお、ここで「ニカイア信条」としたものは、紀元381年開催のコンスタンティノポリス公会議で修正され「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」と呼ぶのが正確であるが、教会の礼拝現場では一般的に修正版を「ニカイア信条」と呼んでいる。

**旧約日課(イザヤ 40 章より)**

・「イザヤ書」は、旧約預言書の一つで、「三大預言書」と呼ばれるものの一つ。主イエスの信仰理解や初代教会の教理解(特にキリスト論に関する理解)に多大な影響を与えている。預言の時代背景に基づいて、39章まで(紀元前8世紀の北王国滅亡の時代)と40章以下(紀元前6世紀の南王国のバビロン捕囚から解放にかけての時代)とを分けて解釈するのが一般的である。40章冒頭部は、初代教会で洗礼者ヨハネの解釈典拠として理解されたことが共観福音書で明示されている。日課箇所は、それに続く部分。

・日課箇所に典型的にあらわれるように、イザヤ書は、神と人との質的差異を強調することに特徴がある。それは、神を「イスラエル・ユダにとっての民族守護神」から「全民族・諸国民にとっての唯一絶対神」へと認識を改めるための前提となっている。同時に、その差異を埋め、仲介する存在としての「預言者」や「宣教者」の存在意義を認めていく前提ともなっている。

・13節「主の霊」は、ここでは「主の企て」と同義で考えられており、さらに「助言、理解、教え、知識、英知」などともほぼ同格で考えられている。旧約中での「霊」の理解は幅広いが、預言者の伝統の中では、ここでイザヤが理解しているように「意志」や「理性」に近い概念で「霊」が用いられている。このような「霊」の理解は、新約においても広く反映されている。

**使徒書日課(1テモテ 6 章より)**

・「テモテへの手紙一・二」は、使徒パウロが自分の宣教旅行に伴っていた若い同労者テモテに宛てて、その教会指導者としての心構えを教えるために記されたものとして著されている。歴史批判的な学者の多くは、これを使徒パウロの真筆と認めず、パウロの後継者らがパウロの名で記して、より一般的な教理指導文書として諸教会に宛てて配布回覧したのと考えている。しかし、このような著者問題は、学問上の議論は別にして、教会で礼拝の書として読まれる上で決定的に重要な意味を持たない。古代教会が使徒パウロの名で書かれた書簡として受け入れ、読み継いできたという事実が重要であり、古代教会の自己理解を読み取ることが大切な視点となる。

・日課箇所は、「神の人」という新約では珍しい呼称で呼びかけるところから始まっている。「神の人」は、旧約では、申命記でモーセに当てて用いられることから始まり、もっぱら預言者を指して「前の預言者」を中心に用いられている重要な用語である。日課箇所には、「預言者」の伝統を受け継ぐ者としての教会指導者、また信徒としての自覚を促す意図が読み取れる。

・ここで特徴的な主張は、「神の人」としての信仰者のあり方が、主イエス・キリストの人としてのあり方と同一視されている点である。キリストの再来(再臨)は、その視点から理解されるものとして触れられており、歴史時間軸上の出来事としてではなく、個々の信仰者がその生き方を鏡を見せられるようにして露わにされ、キリストという模範に照らして評価されるという、ある種の実存的出来事として捉えられている。一方で、神は、預言者の伝統に見られるような絶対神として強調されており、キリストとの同格的な視点はあまり見られない。

**福音書日課(ヨハネ 14 章より)**

・日課箇所は、前主日の福音書日課と一部重なる形で定められた直前の箇所である。御父のもとから遣わされる「聖霊」を、主イエスに代わる「弁護者」と位置づけ、その授与によってある種の理性的な理解が与えられるという視点から「真理の霊」と定義されている。これら一連の教えにおいて、「聖霊」は、あきらかに「御父」と「弟子たち」を直接的に結び付け、その意志において「ひとつ」とならせる概念として考えられている。それを可能とする実在は、主イエスが御父の「言葉」と呼ぶ御言葉であり、また御父の「御業」と呼ぶ行為である。これらに信頼を置き受け入れることが、「聖霊」を受けるとほぼ同義と考えられている。

## 来週の誕生日 (6月7日～13日)

## 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-351 番「聖なる聖なる」( I 66)は、19 世紀初頭に英国教会司祭として詩作に活躍した R・ヒーバーが「三位一体主日」のために作詞。曲は、この歌詞のために 19 世紀に教会音楽家として活躍した英国教会司祭 J・B・ダイクが作曲し、「NICAEA(ニケア)」の曲名が付されている。
- ・21-56 番「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187 番「主よ、いのちのことばを」)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讚美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。
- ・21-402 番「いともとうとき」(= I 502 番)は、19 世紀英国人で福音唱歌作家として信徒伝道活動に励んだキャサリン・ハーンの作詞。曲は、同時代に米国で大衆伝道に携わり多くの福音唱歌を作曲した音楽家ウィリアム・フィッシャーの作曲。大衆伝道運動の中で広く歌われてきた。

## 21-351「聖なる聖なる」

*Holy, Holy, Holy, Lord God Almighty*

1. Holy, holy, holy! Lord God Almighty!  
Early in the morning our song shall rise to thee.  
Holy, holy, holy! Merciful and mighty,  
God in three persons, blessed Trinity!
2. Holy, holy, holy! All the saints adore thee,  
casting down their golden crowns around the glassy sea;  
cherubim and seraphim falling down before thee,  
which wert, and art, and evermore shalt be.
3. Holy, holy, holy! Though the darkness hide thee,  
though the eye of sinful man thy glory may not see,  
only thou art holy; there is none beside thee,  
perfect in power, in love and purity.
4. Holy, holy, holy! Lord God Almighty!  
All thy works shall praise thy name, in earth and sky and sea.  
Holy, holy, holy! Merciful and mighty,  
God in three persons, blessed Trinity.

## 21-56「主よ、いのちのパンをさき」

*Break Thou the Bread of Life*

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me,  
As Thou didst break the loaves beside the sea;  
Beyond the sacred page I seek Thee, Lord;  
My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me,  
As Thou didst bless the bread by Galilee;  
Then shall all bondage cease, all fetters fall;  
And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me,  
Thy holy Word the truth that saveth me;  
Give me to eat and live with Thee above;  
Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me,  
That He may touch my eyes, and make me see:  
Show me the truth concealed within Thy Word,  
And in Thy Book revealed I see the Lord.

## 21-402「いともとうとき」

*I Love to Tell the Story*

1. I love to tell the story of unseen things above,  
Of Jesus and His glory, of Jesus and His love;  
I love to tell the story, because I know 'tis true,  
It satisfies my longings as nothing else would do.
- Refrain:
- I love to tell the story, 'Twill be my theme in glory,  
To tell the old, old story. Of Jesus and His love.
  2. I love to tell the story, more wonderful it seems  
Than all the golden fancies of all our golden dreams;  
I love to tell the story, it did so much for me,  
And that is just the reason I tell it now to thee.
  3. I love to tell the story, 'tis pleasant to repeat,  
What seems each time I tell it more wonderfully sweet;  
I love to tell the story, for some have never heard  
The message of salvation from God's own holy Word.
  4. I love to tell the story, for those who know it best  
Seem hungering and thirsting to hear it like the rest;  
And when in scenes of glory I sing the new, new song,  
'Twill be the old, old story that I have loved so long.